

ISSN 0917-1944

International Society of TAKUBOKU Studies

国際啄木学会会報

第28号



<http://takuboku.jp/>

2010年9月4日発行

■新入会員の自己紹介

木村 忠夫

新入会員です。啄木に出会ったのは大学3年の時でした。就職してから次のような文を書きました。

啄木の書簡に「一切の心の虚飾を去った真の現実暴露の悲哀！……人間は哀しいかな生活幻像に支配されて方が幸せだよ」とあります。救いを求めているとき、救われると期待するのは幻想にすぎない、弱いものが強くなるなんて幻想だ、夢や希望を捨てて、現実を直視することが必要だ。このようなことを啄木から学んだ。

啄木は身分として教師であることを否定した。「一代用教員の職が六国の相印を帯びるよりも榮譽である」と。そして自己流の教育を試みる。英語を話せれば世界中どこへ行くにも不便はない、校歌をつくり生徒と歌ったり、踊ったり、生徒に送別会の自主運営をさせたり、教育勅語中心の形式的な教育を否定した。私は啄木に人としての生き方、教師のあり方を学んだ。

昭和43年頃洪民村を訪ねた。蒸気機関車で洪民駅に着く。国道沿いにあった下宿宅で高藤佐蔵さんに会うことが出来た。記念館の資料はまだ小学校にあった。啄木を確認する旅だった。

木下空太郎（太田正雄）について『国際啄木学会研究年報13』の権藤愛順氏「啄木と空太郎」は参考になった。啄木学会会員の小田原女子短大の木内英実氏は空太郎会総会で「海郷風物記」の諸問題で歯切れのよい講話してくれた。啄木日記には太田正雄がよく登場する。耽美派空太郎を啄木との関わりの中で、違った一面を考えていきたい。

木村 理

石川啄木と私

職種：山形大学医学部外科学第一講座（消化器・乳腺甲状腺・一般外科）
主任教授

山形大学医学部附属病院 副院長

略歴：1979年東京大学医学部を卒業。

その後、キッコーマン総合病院外科医員、
東京都老人総合研究所研究員、
ドイツ・ヴェルツブルグ大学研究員、

東京大学医学部講師を経て、
1998年、山形大学医学部第一外科教授（現在の主任教授）に就任。
2006年より、山形大学医学部附属病院副院長を兼務。

主な学会活動

日本外科学会評議員、日本消化器外科学会理事
日本消化器病学会評議員、日本膵臓学会理事
日本胆道学会理事、日本静脈経腸学会理事
日本外科学会評議員、日本乳癌学会評議員
日本老年医学会評議員など多数。

外科医になって一心不乱に毎日の手術や術後管理、学会発表や論文発表に追われ、石川啄木を思い出すことはほとんどありませんでした。しかし約12年前に山形に赴任し、冬の雪の深さなど、初めて住んだ東北の生活の厳しさを体験し、啄木の歌を思い出すようになりました。

大正と昭和の境あたりで生まれた母は文学少女で、短歌に興味を持っていたのですが、私が小学生の頃、「女学生のとくにごく感動した歌人がいたんだ」といって、石川啄木の歌をたびたび教えてくれました。このことが、啄木に関する強い記憶として残っております。

たはむれに母を背負ひて／そのあまり軽ろきに泣きて／三歩あゆます

はたけれど／はたらけど猶わが生活楽にならざり／ぢつと手を見る

などです。

子供心にもわかりやすく、こころに響くものがありました。

山形に赴任して数年たち、盛岡で外科の全国学会があったときだったでしょうが、啄木の生家を訪れてみました。なにより、母の形見として母が晩年に作った歌のコピーをいつも身につけていたということもその動機であったかもしれません。

啄木の生家では、昔の小学校の校舎やいろいろな本とも出会いました。また啄木の歌集の復刻版も購入しました。何よりよかったのは北上川の岸辺に立ってその柳に触れて歩くことができたことです。そして「ふるさとの山」である岩手山や姫神山もみることができました。国際啄木学会の存在を知ったものもときだったかもしれません。

このあたりでたまたま出会った老齢の女性から昔の啄木の生の話を聞きました

〈自我の啄木の今日性〉

私は、65歳定年を迎えたのを区切りに、学会の入会を決意した。啄木学会との縁は、遊座昭吾さんとの出会いが大きい。1990年代初めに、週刊新聞の文化欄に掲載していた「文学散歩」で、啄木を取り上げた。渋民、盛岡を歩き、学会事務局長だった遊座さんを訪ね、話を聞いた。そのとき『会報』3号をいただいた。

それから98年の三島大会を初取材した。啄木との濃厚なつきあいとなった。天理、水戸、盛岡、新潟、札幌、函館、そして韓国のソウルの大会へとつながつた。

私自身、北海道で生まれ、育ち、大学生生活を盛岡で過ごし、新聞記者として東京に流れしてきた。一見、啄木の流浪の「北帰行」と似ている。が、自我の強烈な啄木は、気になる存在だったが一読者にすぎなかった。

学会の大会、研究発表は実に刺激に満ちていた。加えて、交流会、ソウル行きで会員間のアット・ホームな雰囲気、人間味の好感度は年々高まっていた。いつの間にか、準会員の気分だったように思う。

大学の卒論は、宮本百合子だったし、小林多喜二は同郷の親しみがあったが、「明治の文学」へは関心が弱かった。そこに「啄木と賢治」が入り込んで文学者と時代・思想の關係に興味が広がってきた。

* * *

カール・マルクスは「人間が人間にとつて最高の存在である」といい、「人間の生命の尊さ」を宣言してから百年余り。その理想は古くなってはいない。啄木が「明日の考察—これ実に我々が今日に於いて為すべき唯一である、そうして又総てである」(「時代閉塞の現状」と書いて、27歳で生を全うした精神は、今生きる私たちに力を与えてくれている。

慌ただしく、忙しく、春夏秋冬を過ごしてきた新聞記者42年の生活に、一心のピリオドを打った。「新聞記者としての啄木」を考察したいと考える。(先行研究が多い啄木に近づくなよ!という忠告もあるが)。

そこで、当面、亡くなって13年になる「もうひとつの藤沢周平」の出版に手をつけている。それは、藤沢が小説「石川啄木」を書こうとしていたと遺族から聞いたからだだった。

た。「山に向ひて言うことなし」と歌った「ふるさと」には啄木は二度と帰ることがなかったということでした。それでも啄木はふるさとへの思いをつねに歌い続けたのです。「ふるさとの訛りなつかし停車場」である上野駅に「そを聴きに」いったのもふるさとへの強烈な思いからなのはよくわかります。

渋民小学校の校庭で子供たちが遊ぶ声をききながら、北上川に向かって歩いていくと啄木の歌碑があります。

やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目にみゆ／泣けとごとくに

ここでも強烈なふるさとへの思いを聞くことができます。

啄木の歌の、人を感動させるからくりの一部を少し分析してみます。この歌は、最後の7文字がそれまでの内容の「落ち」として表現されているように思えます。「落ち」というのはちよつと表現が適切でないかもしれませんが、落語の「落ち」、4コマ漫画の「落ち」、あるいは推理小説の「種明かし」というような意味です。つまりそれまでたんとんと状況と状況をおいて最後の句で全体をカバーするよう強烈な、思いもつかないような驚きの言葉、文言で「落として」いるのです。「泣けとごとくに」というのは常人では思いつかない、ものすごい激情の言葉です。

そしてこの「落ち」の方式は前述の歌の「ちつと手を見る」も同様と思われます。つまり「はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざり」というのはある状況で普通の人が普通に読んだ表現だと思えます。あるいは普通の人が普通に表現できる状況です。ここで「ちつと手を見る」としたのが天才啄木ならではの表現なのです。これは啄木以外にはお呼びもつかない表現なのです。

多くの、人を感動させる、わかりやすい、かずかずの歌のなかでとられたこの一つの方式は、庶民に感動を与える、感動を与えやすい一つの方策、方式、「歌式」なのではないかと思えます。

最後に母の形見の歌を紹介させていただきます。母は約30年前に研修医として勤務していた我が母校の附属病院で上司である教授に手術していただき、私自身が受け持ちになりました。

笑顔消して点滴針を子にさしぬ
滴はぬくみとなりて沁みゆく

やりがいがあるといいたい幼顔おきながほ

残している子は研修医として

(木村美代)